

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎗木町 198-3
電話 (043) 485-1801

神様の付度----- 廣吉 正毅 真鯛釣り----- 島村 嘉明
一 瞬----- 島崎 庄平 生活を見つめ直すこと----- 吉井 弘

歌の力

川口 弘子

平成に続く新しい元号「令和」が発表されました。

平成の世は、阪神淡路大震災、東日本大震災による巨大津波、原子力発電所の倒壊、各地での豪雨被害など災害が多発した時代でした。被災された方々は今も苦しい生活が続いていることに心が痛みます。

『花は咲く』は東日本大震災の復興支援ソングとして平成24年にNHKが岩井俊二作詞、菅野よう子作曲で世に送り出しました。支援プログラムのテーマソングとして平昌オリンピックで大活躍した選手や東北地方ゆかりの各界の方々が歌っています。作家印税の全額が被災地の自治体に義援金として寄付されるため、この曲がコンサートで歌われたり、テレビ、ラジオでオンエアされる度に義援金

が増えて行くという画期的な仕組みになっていく曲です。

『唱歌』は明治以降昭和16年まで文部省が制定し、学校の授業で歌われました。

誰もが歌えるのです。中高年世代の人々に愛されています。口ずさむことで幼なじみの顔が浮かんだり、ふるさとの景色をなつかしく思い出し、生きた喜び、生活に張りをもたせる歌は宝物です。美しい四季や行事、地元の民話、暮らしが込められています。声を出して歌いましょう。

春：春が来た 春の小川 ひなまつり めだかの学校
夏：鯉のぼり 背くらべ 茶摘み 夏は来ぬ 海
秋：村祭 里の秋 紅葉 赤とんぼ 故郷の空
冬：母さんの歌 雪やこんこ スキー 浜千鳥
童謡、唱歌に限らず「いき

いきサロン」では、歌謡曲が好評です。青い山脈、リングの歌、憧れのハワイ航路、北国の春、誰か故郷を想わざるなどがよく歌われています。

『佐倉ふるさと体操』は平成21年、佐倉市では、市民の体力維持を目指して、順天堂大学スポーツ健康科学部の監修を得て制定しました。高野辰之作詞、岡野貞一作曲により生まれ、広く親しまれている「ふるさと」に合わせて、佐倉に係りの深い所作から組み立てられています。剣を振る、弓を引く、マラソンの動き、風車、緑豊かな風景などです。介護予防教室や「いきいきサロン」で参加者に広められています。

いよいよ5月。新しい元号の時代が平和で幸多き日々となることを願っています。元気に歌って、体を動かして暮らしていきましょう。

(編集委員)

神様の付度

秋祭りでお祈りをする神様に
一心にお祈りをした。

佐倉の秋祭りは、旧城下町
に御神輿の巡行と山車、御神
酒所が出て賑やかに行われる。
あたかも佐倉絵巻のようであ
る。なかでも最終日の御神輿
の宮入がみものだ。

御神輿が、氏子に担がれて
いま神社の階段に着いた。こ
こから階段をのぼり、御神輿
が宮入をする。あたりは、見
物する人達で身動きができな
いほど込み合っていた。

先ほどから、はんでん姿の
若い女性たちが扇子をゆらし
「えっさの、こらさの、えっ
さっさ」と、氏子に掛け声を
かけている。氏子は御神輿を
担ぎ階段をのぼっていく。だ
が、途中で力尽きて階段の下
にさがった。

私は、その時に御神輿の神
様に胸のうちをお祈りした。
すると信じられないことが起

きた。御神輿の方から「自分
は運の良い人間だと信じれば
悪いことはない：云々」の言
葉が聞こえてきた。さらに次
の言葉を期待したが、あとは
何も無かった。

さっきの声は、神聖で俗つ
ぽさが全く感じられなかった。
ふと思いついた。私に御告
げ？ その声は私の心を、ま
さに推測し言い当てていた。

だとすると神様からの付度で
はないか。しかも私にとって、
ご加護にもとれる付度に違
ないと自分なりに納得した。
このとき女性のあの掛け声と
御神酒所のお囃子が、耳に入
ってくる。私は、この声でい
つもの自分にもどり周りを見
た。

ちょうど、宮入を終えた御
神輿が、人の行きかう境内を
粛粛として進んでいた。お祈
りして願いが叶い満ち足りた
幸せな気分になった。

(ユーカリが丘 廣吉正毅)

真鯛釣り

9月下旬、外房へ真鯛釣り
に出かけた。大原ではテナヤ
という仕掛けに5疋位の冷凍
エビを付けて真鯛を釣る。「ひ
とつテナヤ」と呼ばれる釣法
である。

秋の真鯛釣りは、春の釣り
と違って楽である。理由は、
タナが浅いこと。春の釣りは、
タナが50疋位で水深が深いた
め、底が取りにくく難しい。
しかも釣り場が港から遠く、
1時間位、船に乗らなければ
ならない。しかし、秋は真鯛

が浅場にやってくるため、タ
ナが10疋位と浅く、釣り場も
港から15分くらいである。港
を出発して、休んでいる間も
なく、すぐに釣り場について
しまう。

早速、仕掛けにエビを付け
て第一投。と、すぐアタリあ
り。素早く合わせると強い引
き。真鯛だ。慎重に巻き上げ
て30疋くらいの中型をゲット。

その後もポツポツと釣れ、そ
の日の釣果は、大物は釣れな
かったものの、真鯛が7匹釣
れた。外道にはショウサイフ
グ、カワハギ、カサゴ等が釣
れ、クーラーがにぎやかにな
った。同行した初心者も真鯛
を3匹、ショウサイフグを6
匹釣って、満足して帰った。

家に帰ってから、真鯛は早
速、刺身でいただいた。美味
なり。自分で釣った魚は格別
だ。カワハギとショウサイフ
グは、船長が船で捌いてくれ
たので、これも一緒にいただ
いた。冷酒が進む。

秋が深まるにつれ、真鯛も
大物が期待できるようになる。
初心者でも楽しめる秋の真鯛
釣りに挑戦してはいかがです
か。

(宮前 島村嘉明)



一瞬

一瞬・瞬時・瞬間：日常良く使う言葉です。要約すれば「またたくま」ですが、使い方によつては文面が絶妙に変わつてゆくのが日本語の巧みたるゆえんです。一瞬にして立ち直る、瞬時に蘇る、その瞬間再び立ち上がる。何という心強い言葉ではないでしょうか。

近頃私の身の回りでこんな事がありました。買物をすませて階段を降りようとして最上段の階段を踏みはずしてしまつたのです。幸い手ぶらでしたが当然のごとく前につんのめり、手すりに掴まる余裕もなし。その時、同年代の男性が偶然階段を昇つてきて私の身体を支えてくれたのです。あわや12段を転げるところ、落ちずにすみしました。一瞬の内に足を踏みはずしましたが瞬時に行動したお陰で次の瞬間有難い助けが入つたのでし

た。

瞬く間に変化するのはこの世の常。ただ前進あるのみの今日は遅しく頼もしくすばらしい。「日進月歩」も今や「毎秒進歩」地球の裏側の出来事も瞬時に手元へ届く。朝：昼：夜：が来て丸い地球も今や四角い一枚のキャンバス。AIも加わつて情報伝達技術はあなどれません。

私達が日々暮らしてゆく上で大切なのは、一瞬ではありません。長い間に培つてきた周囲との絆や信頼、人と人の交わりから成り立っているのです。けれどもそんな中、一部の人達の身勝手な行動があると、瞬時にこのバランスが崩れてしまう。困つたものです。

(上志津 島崎庄平)



生活を見つめ直すこと

平凡な日常生活にいる。老いは忍びよる。そこで、普段の着を思い切つて、新しいものに変えた。とくに、カラ―のものにした。高齢者らしい「じじくさい」ものを捨てた。

外に出るときは、玄関先で、女房が火打石で、「行つてらっしゃい」とやることにした。世間には、七人の敵がいるという。よたよた人は、相手にされない。そこで、積極的に、自分から未亡人や人妻に声をかけている。不思議なことに、返事がくる。すると、ヒゲをそり上げて、つくり笑顔になつた。声も少しつやが出てきた。言葉づかいも、物腰もや

わらかくなつた。

高齢者は朝が早い。やることがない。そこで、心して「山折鉄雄」(※)先生のまねをする。「お香」を一本つけるのである。ただ、約30分座つ

ている。唯、座っている。

夜は、CDの絶対音528Hzを聞く。もやもやがスーと消える。本当にすごい。妙なCDである。規則正しい生活スタイルである。

どうか皆さん、孫をみるように、私を見てやつて下さい。小石を投げないで下さい。

老いの危機にさらされると、人は自分を見つめ直す。生きかえつた気持ちになる。生を実感する。映画「万引き家族」をみて、生活をみつめ直した。

(※)山折哲雄『ひとり』の哲学』新潮選書 2016

(臼井台 吉井 弘)



5月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「趣味」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL: 043-485-1801 FAX: 043-485-1803

〒285-0025 佐倉市鏑木町 198-3

E-mail: chuo-public@city.sakura.lg.jp

URL: http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

『なかま』は佐倉市民カレッジの学生と卒業生で構成される編集委員が編集を行っています。

さくら道

中央公民館で「おくりびと」の上映があった。映画に熱中する時期があった。生来のずぼらで、その頃収録した多くのDVDにタイトルが書かれていない。この映画も眠っていると思うが探そうと思うと気が遠くなる。こんな状況で鑑賞機会を得た事は幸運であった。

れる。尊厳ある死がテーマの映画だが、旅たつ時人は何を思うのだろうか。幼い頃、主人公を捨てて亡くなった父親の手に握られていたものは、川原で主人公が渡した「小石」であった。舞台はUターンした郷里山形であるが、移り住む多くの市民が高齢となる佐倉市でも共通する内容だ。

公共施設で迫力ある音響の元、この映画を鑑賞できたことは大変有難かった。

（前田 幸博）

あとがき

昨年4月事故による腰部骨折で車椅子生活を余儀なくされた『なかま』編集委員の皆さんには暫らくご迷惑をかけた。

休んでいた間ノートタッチだった『なかま』4月号より6月号までの3ヶ月分を拝読させて戴いた。繰り返し読み進むうち、投稿者や編集委員の皆様のご苦勞が文面からよく伝わってきた。

今年5月に編集の担当も3

年目を迎え責任も以前にも増して重くなった様な気持ちになっっている。

3年生からは4コースになり各クラスから新たに1名から2名宛の同期生及び1年生の新編集委員が入ってくる。楽しみにしており大いに期待している。

『なかま』は佐倉市民の投稿により成り立っています。皆様活発な原稿を心よりお待ちしております。

（田中 敏雄）